The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	堀田善衛と「上海体験」 : 「身分転換」でめざめた日中関係への思考
Author(s)	曾, 嶸
Citation	阪大比較文学. 2013, 7, p. 120-132
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

堀田善衛と「上海体験」
―「身分転換」でめざめた日中関係への思考

曾 嵘
ZENG Rong

はじめに

「一九四五年三月二十四日から、一九四六年十二月二十八日まで、一年九ヶ月ほどの上海での生活は、私の、特に戦後の生き方そのものに決定的なものをもたらした」[1]と、堀田善衛（以下、堀田）は「上海での生活」を自らの人生の転換点として位置付けている。他方、本多秋五は「上海における敗戦体験が、堀田善衛の文学を決定した」[2]といい、「敗戦体験」が堀田文学の原動力だとも評価している。堀田本人を含めた以上の両氏は、「上海体験」が堀田の人生と文学に決定的なものをもたらしたと明言しているが、その「決定的なもの」の正体については全く言及してはいなかった。

2008 年 11 月、上海時代の見聞や心情を記録した堀田の『上海日記　滬上天下一九四五』（以下、『上海日記』）が出版された。編集を担当した紅野謙介の解題や、林京子の特別寄稿及び郭偉の書評は、上海時代の堀田の軌跡を辿って、読者に当時の歴史背景や社会の実態を呈示したが、この「上海体験」に導かれて堀田が如何に戦後作家へと成長したかについて、作家の認識の面から分析を行っていないと考えられる。

いわば、堀田の「上海体験」は一つの「身分転換」である。国際文化振興会の派遣者という立場から、国民党中央宣伝部の役員という立場に至るまでの身分の転換につれて、変化し続けた彼の認識こそが戦後の堀田文学を形成する「決定的なもの」ではなかったかと筆者は考えている。本稿では、『上海日記』や対談、エッセイなど本人の残した叙述と、他の関係者の証言、公式文書など堀田以外の人物の記録に基づいて、堀田の「上海体験」を歴史背景に還元させ、それに伴う「身分転換」について考察を行い、最後にその体験が彼の認識の変化にどのような影響を及ぼしたのかを分析したい。

1　状況と認識のズレ

1939 年慶応義塾大学に入学した堀田は翌年に仏文科へ転科、大学在学中主にフランス文学をはじめ西洋文学を耽読し、「荒地」「山の樹」「詩集」などの詩人グループと親しんで詩の創作を始めた。1942 年 9 月、彼は戦時下の特例措置によって、半年繰り上げて卒業し、海軍部に属している国際文化振興会に勤め、欧州からの軍事情報の翻訳などの仕事に従事する傍ら、伊集院清三の紹介で山本健吉や吉田健一が創刊した雑誌「批評」の同人、後編集者となり、詩や評論に力を注いだ。1944 年 1 月、東部第四十八部隊の召集を受けて入隊したが、骨折や肺炎で三カ月間の入院生活をしたあげく、ついに除隊、1944 年 5 月頃に再び国際文化振興会や「批評」に戻ることになる。当時の仕事の内容や文学活動から見れば、堀田の関心はもっぱら欧米にあり、中国や中国文学からは遠い場所にいた人間である。ところが、1945 年 3 月 24 日、彼は「上海客死」[3]という覚悟をもって国際文化振興会の派遣員として上海へ赴いた。その名目とは、「東京で日本語の「中国文化」っていう雑誌を出して、上海で中国語の「日本文化」っていう雑誌を出す」[4]というものである。

この雑誌を交換するプログラムは、実に国際文化振興会が、1943 年以降の軍事勢力が「大東亜」に集中するという戦局の変動に合わせて、文化宣撫活動を東アジアに移動する方針で計画されたものである。その経緯については、芝崎氏が詳しく説明している。

> 一九三八年以降発行されてきた『国際文化』は、昭和一六年度には六〇〇〇部、一七年度以降は四〇〇〇部と、部数制限を受けながら発行を続けてきたが、ついに四四年六月の第三一号で終刊した。同誌には、海外版を発行する計画があった。それは「大東亜共栄圏各地地域に於いて邦人による新文化建設並文化指導の参考に資するために月刊雑誌を編集発行致し度し」というような内容がされていたが、これは実現しなかった。結局この構想のかわりに、「中国路線」の一環として計画されていた「日華文化交換論文集」刊行構想が浮上した。そして、『国際文化』の終刊と共にその交換論文集が発展したかたちでの雑誌が創刊される計画が進められていたのである。この「日華文化交換論文集」は、国際文化振興会と国民政府宣伝部とのあいだで協議がおこなわれ、「文化に関する季刊論文集を夫々両国に於いて編纂し交換発行する」ことで合意を見た。[5]

1944 年 6 月から、国際文化振興会は雑誌の海外版を発行する計画があったが、頓挫してしまい、その代わりとして、「国民政府」と協議を結んで「日華文化交換論文集」を創刊するに至った。このプログラムは、一見、日本と中国が平等な地平に立って文化交流を行っているように見えるが、注目したいのは、文中の「国民政府」が帝国日本の後ろ盾によって成立した傀儡政権「汪兆銘政府」だということである。中国人に是認されなかった「汪政府」と締結した文化交流協議自体は、一種空疎な存在にほかならない。この意味で、国際文化振興会と「国民政府」の協同の下作られた「日華文化交換論文集」は、実に帝国日本の威光の下で遂行された文化活動であったと言えよう。このプログラムに取り組む堀田は、「植民地」における日本の文化の宣揚者に充てられ、いわば「外地」における日本の「文化役員」であった。

だが、当時の堀田はこのプログラムの背後に、歪んでいる日中関係を見据えることができなかった。日中関係に対する現状の認識を欠いていたことは、中国語を勉強する彼の態度からも窺える。彼は、1944 年 5 月頃国際文化振興会に戻った直後に中国語の学習を始めた動機について、次のように回想する。

> その頃国際文化振興会及び文学界周辺には一種の中国ブームがありましたが、河上徹太郎さん、山本健吉、それに私など、中国語を習うことが非常にはやりました。大東亜戦争の解決には日中問題の解決が不可欠である、というイデオロギーがそこにはあったと思います。河上さんなんかのサイドの大東亜文学者大会から来た線だと思います。[6]

周りの雰囲気に便乗しながら大東亜戦争の解決に向かい、中国語を習って中国に近づこうとする堀田であるが、その姿勢からは、日本の「文化役員」としてのイデオロギーが見られ、同時に、日中戦争という状況に置かれる自分の位置に対する彼の無自覚さも仄見える。

現状の認識を欠く若い堀田は、素朴なイデオロギーに促され、上海に渡航した。開高健との対談において、彼は上海に着いた当初のことを次のように述べた。その中で最も注目したいのは、彼が上海の日本人の生活を見て怒りだしたことである。

> ぼくはね、講演タレントになっちゃった。日本は空襲で大変だけど上海はのうのうとしているわけだからね。酒はいくらでもあるし、ビールだって何だって、タバコだってイギリスのスリーキャッ

スルなんかやたらにあるしね。で、最初はぼくは怒ったらしいんだな。格差があんまりひどいからね、天国と地獄どころじゃないからね。それで武田君はぼくを連れて日本ビールへいって、日本の状況についてぼくに講演さすんだ。そこでビール三ダースほど御礼に貰ってきて、それがなくなると、今度は武田がぼくをどこかの保険会社へ講演に連れていくんだね。[7]

上海の土地を踏んだ堀田は、食物さえ欠乏している「内地」より、上海にいる日本人の生活が思いの外豊かであることに憤慨したという。この憤りとは、同じ日本の国民であるものの、「内地」と「外地」の生活には雲泥の差がある不公平さに注目して発せられたものである。逆の視点から見れば、彼は当然のように上海を日本の「外地」として捉えているのであり、彼のまなざしは被植民地の民衆の生活にまでは届かなかったと考えられる。

文化交流活動の裏に隠された国際状況、及びその活動に取り組む文化役員としての自己の位置に対して、堀田が認識できていなかったことは明らかである。この認識上の無自覚は、上海における実体験によって一掃された。殊に日本の「敗戦」が彼に大きな衝撃を与えた。

2 「敗戦」による認識の獲得

1945 年 8 月 11 日、朝の通勤電車の中で、堀田は中国新聞協会の赤間という男から日本の「降伏」を知り、その後、「中華日報」に勤める中国人・路易士[8]からその事実を確認した[9]。「和平です、和平です、戦争済みました」という路易士の歓声を聞いたその時の様子を、彼は日記において記している。

なみいる日本人の僕らはみな暗い表情になった、と同時に何とも云へぬ苦しいものがこみ上げて来、眼のやり場に困った。武田氏は眼を大きくまるくして、号外を読み込んでいた。私も読んだ。[10]

驚愕と心の苦痛が表されている文章である。丸山真男はポツダム宣言の受諾、それを知らされた時の国民の感情が、「公的」なイデオロギーと「私的」なエゴイズムとの分裂だったと表現したが、これは「外地」にいた堀田らには当てはまらないと思われる。堀田らの胸にこみ上げてきた「苦しい」ものとは、日本の「敗戦」とともに受けた衝撃と、中国人仲間であった路易士が日本側の「敗戦」により態度を変えたという、二重の衝撃への反応だと考えられる。

中国人の変化は、堀田が上海で見た日本の「敗戦」風景の一つである。彼は日記の中に、協同で「日中文化交流」活動を取り組んでいた中国人の態度の変化に注意を払っていた。

諸がまたまたそはそはとどうしたらよいかわからない、と云ったあげくに「林さんたちはどうしますか」と云った。これで分かった。どうしたらよいかわからないと云ふのは、こちらのひがみではなく、お前たち日本人はどうしたらよいか分らないだろう、と云ふことなのだった。[11]

林俊夫の家を訪れて、終戦後の行方について相談する中国人の諸綬綺の言動を見て、堀田はその感じたことを如実に記録している。彼から見れば、戦時中は日本人の側に立っていた諸は、日本の「敗戦」によって、既に日本人を嘲笑する側に移行してしまった。このような体制の変化による中国人の心変りに対して、堀田は一種の憤りを示していた。それと同時に、彼は中国人の心の移り変わりを「日策」の推進方策

と結び付け、その最終的な原因は軍の統制にあると考えていた。

軍部の力による支配の先棒をかついでいた文化人から見れば、日本の政策の挫折を象徴する「敗戦」を招いた最大な原因とは軍部の失策である。堀田の日記には、「敗戦」の情報が耳に入った当日の林俊夫氏の言葉が収められている。

> 林氏、室伏女士と三人で虹口の方へ向ひ、四川路の憲兵隊の前まで来た時、林氏は思ひ屈したやうに、青白い顔を皺で刻んで遂に云った。「これが日本の対支政策の末路だ、己は帰って本を書く、『遠来の暴徒』（これは日本兵の強姦事件を遠まはしに支那新聞が書いた言葉）といふ言葉、また『強盗の末路』といふ言葉を発せしめたものは何か、といふことは、どうしても今度といふ今度は書かねばならぬ」
>
> ……
>
> 林さんのこれが対支政策の真相だ、と云ふ言葉が耳にのこった。[12]

「暴徒」、「強盗」などの言葉には、「日策」の失敗をもたらした軍部の非人道的な振る舞いに対する文化人の批判が見られる。この林氏の発言の「対支政策の真相」という部分を受け止め、「耳にのこった」堀田は、林氏と共通する考えを持っていたと考えられる。堀田によれば、彼が上海に到着して「十日もたたないうちに」、現地で「強制され」る「変態的な」実態に「絶望に近い憂鬱に襲われてしまった」[13]。日本の軍部と中国人の間に挟まれた文化役員の苦悩を、彼は後に正直に吐露している。

> しかし、何故にかくも長期間前述のやうな出鱈目が行はれていたのであらうか。これについても、今日はっきり簡明に答へることが出来る。矢張り、日本のやり方が常に政策、国策の一点張りでその間に人間性に対する反省を欠いていたからである。これとても、私共にとっては以前から分っていたことなのだ。しかし我々の微力を以てしては如何にしても覆へすことが出来なかったことを、私は告白する。[14]

人間性を欠いた軍の政策に反感を持ちながら、軍に管制される状況に反抗できない「外地」の文化役員の姿が垣間見られる。もし前記の林氏の発言が直接に軍へ向って爆発した文化役員の怒りというなら、堀田の発言は文化役員が怒りだす理由と背景を呈示したと考えられる。良識ある知識人としては、軍部の人間の非道な振る舞いを目撃して、日本の政策を推進するやり方に憤りを感じていた。一方、軍の統制の下に置かれた文化役員としては、軍の乱暴に対して無力を実感してもいた。「敗戦」以前から文化人の心の中に潜んでいた軍の統制への反感、嫌悪が、この「敗戦」によって誘発され一気に爆発したと考えられる。林氏の批判はもちろんであるが、「敗戦」によって軍の統制力が弱まった際に、文化交流活動に従事する人間としての真情を中国人に伝えようと考えて、「告中国文化人書」を配布しようと思い立った堀田の行動も、軍部に反発する行為と捉えられる。また、「敗戦」を知った当日に、武田泰淳に文学者として自分の使命を告げた堀田は、この軍への批判意識に基づいて語ったと考えられる。

> 今日この時の中国人のうつりかはりといふものを、人の心の内面の問題として、単に政策的なことではなくて、何とかして政治論ではなく人の心にしみ入るやうな工合にして内地の人に知らせねばならぬ、それをやるのは、僕ら文学に携る仕事をする人で上海にいるものの大切な仕事だ。[15]

この頃、堀田は「中国人のうつりかはり」を、「心の内面の問題として」、「政治論」と異なる形にして、「内地の人に知らせねばならぬ」と主張していた。彼の主張では、二つの点が注目に値する。第一点は、「政治論」や「政策」より、彼はむしろ「人の心」、「内面の問題」に焦点を当てていることである。第二点は、「外地」のことを「内地」に知らせる使命感とも言えるものが彼にあったということである。堀田が前者に焦点を絞る理由として考えられるのは、もっぱらに政策で動いた軍部の統制が民心を把握できない空疎な強権にすぎないと堀田が認識して、それを逆に日本の失敗を招いた所以だと批判したからであろう。後者の「中国人のうつりかはり」を「内地」の人々に知らせるのは、「日策」の失敗から検証したことを「内地」の人間に伝えなければならないという「外地」の文学者の使命を感じたからと考えられる。

以上のことから、「外地」にいる軍部と文化界との分裂は明らかである。「敗戦」は、文化人の批判をより激しく誘発した。文化役員の側に立って、軍部のやり方は人間性が欠如していると批判する堀田は、言うまでもなく、当時の日本の「中日親善」という標語が幻像でしかないことを看破した。言い換えると、彼の軍への批判は「大東亜共栄圏」というスローガンに隠された惨めな事実を了解した上で発せしめたものである。これが上海での実生活を通じて堀田が獲得した新たな認識とも言えよう。「日中文化交流」というプロジェクトに投身した青年堀田は、「大東亜共栄圏」という理想を抱えて上海へ赴いたはずであるが、上海での経験は彼に「対支の真相」を認識させ、それを改善することのできない無力感を味わったのである。

この状況と対面した彼は、「我々文学に携はるもの」が、「精神的に実に多くの無理をして、盲目の戦車の如くに破局に向ってまっしぐらに驀進する日本の後を遅れ遅れてついてゆかざるをえなかった」[16]と言い、文化役員としてやむを得ず国家の膨脹に加担したと、自己の位置に対して自覚するようになった。その自己認識は、勿論、社会現状を認識した上で獲得したものである。上海での実体験や日本の「敗戦」は、彼のイデオロギーに強い打撃を加えると同時に、日中情勢や自己の立場に対する一つの認識を与えたのである。だが、この頃の彼は主に民心の移り変わりや「日策」の失敗を軍の推進に求めるなど、その過ちを追究するだけで、日中の葛藤における根本的な内因を見抜くに至らなかった。

他方、上海の「占領軍」が勢力を喪失したことにより、堀田の身分は、「占領国」の文化役員の立場から一般的な日本国民に移った。しかも、すべての勢力を失った「敗戦国民」として、被支配者であった中国人の統治の下に置かれる境遇に陥ったのである。

3　「敗戦」後の意識

「敗戦国民」としての堀田の意識の変化に触れる前に、彼の置かれた周辺環境を説明する必要がある。

紅野謙介氏は『上海日記』の解題において、「敗戦後、上海在住者だけではなく、南京、また華南の各地にいた日本人が多く上海の虹口地区に強制的に集められた。巨大な捕虜収容所となったのである」[17]と解説しているが、当時の状況に関してはより精確に把握しておく必要があるように思われる。

当時、国民党政府は引揚げ船が不足したため、便宜を図り、上海の周辺地方の「日僑」[18]を上海に集中させた。そもそも 1945 年 8 月 10 日までに上海にいた「日僑」は約 64504 人であったが、新たに約 30355 人が入り、合計約「10 万」[19]人に昇った。この厖大な人数は数に限りある引揚げ船で日本に送還される前に、1945 年 10 月 13 日まで、全て「集中区」に住むよう国民党政府に命じられた。

「集中区」とは、国民党政府がナチスの「集中営」[20]と意識的に区別して、「民主主義」の人道面をア

ピールして設置された空間である。全体を四つの区[21]に分け、元来の日本人住宅区―虹口を含め、上海の東北部に位置していた。国民党の第三方面軍に属する日僑管理処がその管理機関[22]で、用いられた管理制度は中国伝統の戸籍制度―「保甲制度」である。保甲制度は「集中区」を一般的な「収容所」と区別をつけ、日本人の自治を求める重要な制度であると、日僑管理処の責任者である王光漢氏は第一次保甲訓練会議において[23]強調した。その編成基準としては、「戸を以て単位となし十戸を一甲とし、十甲を一保とす」ものであり、小さい単位から戸→甲→保→区という順番である。各管理者は、「甲長は本甲内各戸長より公選せられたる一戸長を任に充つ。保長は本保内より公選せられる一甲長を任に充つ。区長は本区内各保長より公選せられたる一保長を任に充つ」というように、民衆の選挙によって選出される。

「日僑」を指定地域に集中的に住まわせ、彼らに出入りする時間[24]を充分に与える国民党政府側の目的とは、二つある。一つは日僑の人身安全を守って、正常的な生活を維持するためである。もう一つは、集中居住で、統一的に思想教育を行い、日本人を日本の軍国主義と決別させるためである。だが、「日僑」側からみれば、生命まで脅かす危険がなくても、資産家財などは全て没収され、引揚げ時期も確定できない状況の中で、基本生活を維持するため、経済上の圧力に怯え、生活の困苦や精神的な不安に襲われていたであろうことは容易に想像できる。終戦後、生活費を稼ぐため設けられた屋台がいたって繁栄した「集中区」の光景は、「日僑」の不安を現すものだとも言える。

このような状況の中、「留用」は生活難に直面していた日僑にとって一つの好選択であった。「留用」とは、戦後に日本人が中国政府や企業に残って働くことに対する中国側の用語である。その手続きとしては、1945 年 9 月 24 日に第三方面軍より発行した訓令によると、主に本人の申請、日僑管理処の推薦、仕事先の承認という三つの段階がある。まず、その姓名、年齢、性別、本籍、現住所、電話番号、出身地、専門技能、詳歴、どのような仕事に就きたいかなどの事項を、普通の中国十行紙に毛筆で記入し、一式二連の同証明書を直接日僑管理拠にある日本籍の技術者登記所に申請登録し、審査の結果を待つ。その後、日本籍技術者として審査を経て合格したら、申請書に就職範囲を付け加えることができる。最後に、日僑管理拠による仕事の派遣通知が来てから、服務証を受け取って着任する[25]。手続きとしては複雑とは言えないが、仕事の種類や定員が限られているため、「留用」されるのは容易なことではない。

ほかの「日僑」と同様に、堀田も終戦後に「集中区」に住んだ。彼の日記によれば[26]、1945 年 11 月 1 日、その日から「日僑北第一区第四十保第七甲第八戸」という白腕章をつけて歩くことになった。第一区は最も大きな区[27]であり、さらに南と北の二区に分けられる。堀田はその北区の祥徳路に住んでいた。また、「腕章」とは日僑の身分を示す標識物で、全部で赤、緑、白と三色に分けて、赤が技術人員、即ち「留用人員」、緑が独身者で、白が家族を持っているということを表す[28]。堀田が白「腕章」をつけていたのは、彼が従兄の市川定興氏と一緒に住んでいて、まだ留用とはなっていなかったからである。

この時期の心情を、彼は日記に詳細に書き示している。「敗戦」を知った日から日記を中断した堀田は、10 月 13 日に再開した日記において、次のように記している。

> 終戦大詔－中山氏帰滬－愚園路から新上海―新上海―祥徳路。双十節などいろんなことがあったものだ。だが、もう少々僕は、すべてがいやになるといふ例の精神気候が来ているので、大して何をする気にもならない。（後略）
>
> 先日来、昭和の精神といった評論を一篇書きたいと思っているのだが、そのための漱石の「こころ」がほしいが手に入らぬ。（後略）[29]

虚無や無力な精神状態に陥っている堀田の姿が見えてくる。このような状態にいる彼が「昭和の精神」

を書きたいというのは、おそらく「敗戦」の衝撃で一つの時代の精神を書き留めたいと考えたからではないか。国家の発展と共に培われた堀田のイデオロギーが、国家の崩壊によって崩れかけたと考えられる。

このような精神状況の中、10 月 16 日の日記では、中国で「留用」されるかどうか心の動揺を示し、現実の問題に悩んでいる様子が窺える。

> 頃日の動揺の一つは、中国側の機関へ入って働いてみようかといふことと、何もしないでこのままぼんやり市川さんの居候になっていようかといふ二つである。しかし思へば民主主義の宣伝屋などにはどうしてもなれないのである[30]

「敗戦」で生じた精神的な虚無と生存条件を確保する生活の圧力は、当時の堀田に付きまとい並行していた問題である。これがいわゆる「敗戦国民」の困惑であろう。だが、後者の保持のために堀田も「留用」への興味が以上の日記には微かに表れているが、同時に、「民主主義の宣伝屋」にも抵抗感が強くて、留用への躊躇いが読み取れる。しかし、1945 年 11 月 12 日に開かれた「文化座談会」[31]によって、彼の躊躇は解消された。

前述したように、国民党政府が日本人を集中的に管理する目的の一つとは、統一的に思想教育を行い、日本人の「軍国主義」の観念を排除するためである。この目的を抱える国民党政府は、文化、宗教、教育、政経という四つの面から、いわゆる思想教育に力を注いだ[32]。堀田が参加した「文化座談会」もこの思想教育の一環である。この座談会において、日僑管理処の責任者である王光漢が「革新文化運動」と題して挨拶のスピーチをし、「日有其新」「保旧如新」「整旧為新」「除旧怖新」という四点から文化運動の目的を説いた。その結びに、彼は日本の文化にも触れ、日本の文化人に革新の必要性を強調した。

> 日本の文化はいまや革新の時機に臨んでいる。須く先づ格子に閉じこめられた生活から解放されて、自身の活力を増し、不断に新に「革命」、「創造」、「承継」および「総合」につとめ、古来よりの文化の基礎に、時代の色を塗り、調子諧和、絢爛奪目の新作品をつくるべきである。また近代科学の発達によって国際間の距離が短縮せられ、各民族文化の特点も次第にそれにつれて合理的発展をなし、渾然一体たる世界性を具有する文化の主流を形成するに至るであらう。これまた革新的文化運動に従事する者の理会すべき点である。[33]

「時代性」と「世界性」のある文学を創作するのが文学者としての使命だと王氏は説く。「時代性」と「世界性」はまさに戦後の堀田文学が備えていた特徴とも言えるが、その啓示をこの座談会から受けたとまでは言い難い。が、政治論ではなく、文化論の面から国際間の連携を説き諭す王氏の発言に対して、堀田は素直に受け入れたということが、翌日彼が「三民主義」[34]を読み始めたという行動から窺える。11 月 13 日の日記では、彼は文化座談会に参加した後の行動や気持を書き留めている。

> 今日より「三民主義」を読みはじめる。民族主義の第一、二講を読むに結論はすべて「亡国滅種」の危機を高唱するにある。三民主義とは救国主義であるといふ冒頭の心がよく分る。
>
> ともあれ頃日「中国と日本」といふ、かういふことに関する気持ちがしきりに動くのを感じる。T は未だ情熱がわかない、と云ったが、それは文士としての T の気持として分らぬではないが、ぼくには未だ T のやうに人間のうるささといふ気持がさして大きな影をはなっていない。[35]

自ら「三民主義」に触れるに至った堀田は、明らかに国民党政府の宣伝に動かされたと考えられる。また、「三民主義」を「救国主義」として読み取ることから、彼は触れたことのない中国の革命綱領である「三民主義」に触れてみたいという姿勢が見られる。この姿勢は彼の武田泰淳との会話の中にも反映している。「中国と日本」に関心が動き出したと武田氏に告げる堀田は、心の内にあった「民主主義の宣伝屋」への抵抗感が少しずつ消え去っていって、中国や中国の思想に対して興味や期待が湧いてきたようである。

さらに、11 月 14 日となると、彼は川喜多氏[36]にも留用について相談をし、「日本連絡員」への希望が強くなった。

> 十二時半から門番。二時半のかはりめは中華映画の川喜多社長。川喜多社長と十二日の文化座談会の結果について話し、中日文化の交流のよい機会はいろいろあるといふ見透しをいろいろと話す。
> （略）
> だんだんいろんな人が帰るであらうが、ぼくはあまり帰りたくない。出来うれば、若し中国文化服務社なるものが相当有力確実なものとすれば、その中の日本連絡員くらいにはなってもよいとさへ考え、希望し出した。[37]

先日の「日本と中国」について関心を持ち出した堀田は、川喜多氏と相談した時点で、既に文化交流に努める決意をしている。中国と日本を文化交流の面から考えようとする堀田の意識はここに至って一層明晰になったと考察できる。「日本連絡員」とは日本と中国の間に立つ仲介役である。この役職を希望する堀田は、再び両国文化の交流に投身する意識があったのではないか。この時の堀田にとって国民党への「留用」は、単に生計を立てるための手段だけではなく、むしろ日中の文化交流に努める契機として見たと考えられる。

このように、「民主主義屋」への拒否から「日本連絡員」への希望という堀田の意識の変化は明らかであ。日中文化交流活動を再発することに対する堀田の意欲を掻き立てたのは、国民党政府の思想教育だと考えられる。だが、戦時下の国際文化振興会の交流活動と異なり、今回はその反対側である中国の宣伝機関に入ることになる。日本の敗戦によって、彼の意識を支配していた帝国日本のイデオロギーが既に消え去ったことは注目に値する。また、イデオロギー色の強い中国の宣伝機関に立ち入ることで、中国の中心部から中国を知って日中文化交流を図ろうという意識があったと推測できる。したがって、「留用」を通じて中国人や中国文化と接近した堀田の意識は、もはや国際文化振興会の文化役員時代と違い、帝国文化の宣揚ではなく、一人の文学者として、人間の内心を重んじて文化や文化交流を行う方向に傾いている。このような意識を持ち、「三民主義」を「救国論」として読んだ堀田は、中国に微かな期待や希望があったかもしれない。だが、「留用」中に、彼は国民党政府に対する希望や期待をすべて投げ捨てている。

4　「留用」での認識の変化

堀田は日記において、自身の留用の経緯に関する記録を残した。1945 年 12 月 13 日に、対日文化工作委員会の日文雑誌「新生」の編集員を務めている須田禎一に誘われた。その誘いを快諾し、翌日から「新生」の編集に取り組むことになった。出勤証明書を手に入れたのが 12 月 21 日[38]だとも記している。この順番から見ると、おそらく須田禎一との話し合いで、「新生」を編集する意向が決められてから、技術者

登記所に登録したと考えられる。留用時代の仕事について、彼は対談や回想の中で繰り返し以下のように語っている。

> 私がその宣伝部でまず最初にやったことは「中央日報」という国民党機関紙の論説を日本語に訳すことでした。（略）
> そのうち、上海中央広播電台という放送局の日本向けの放送をやるようになった。つまり、アナウンサーです。中国の主な新聞にあらわれる対日世論のレジュメや、引き揚げ船に関する情報などをアナウンスするわけです。はじめに、日本向けのコール・サインとして、「上海ブルース」などの日本の流行歌を流して、一時間ぐらいやる。それと同時に、自分で原稿をつくって英語放送もやりました。[39]

この回想では、留用期間の仕事が主に日本語の翻訳と、対日世論や引揚船についてアナウンスすることにあったと堀田は述べている。彼は、雑誌「新生」の編集という名目で中央宣伝部に入ったことについて全く触れていない。実際に、彼が『新生』の編集者となったのは 1945 年 12 月 14 日である。アナウンスの仕事は 1946 年 5 月 17 日から始まり[40]、中央広播事業管理処に属する上海広播電台（中波長）で、月曜日から土曜日、毎日 16 時 30 分から 16 時 45 分までニュースを放送した[41]。「中央日報」の翻訳をし始めたのは 1946 年 6 月 18 日[42]である。

中央宣伝部の留用時期の堀田の仕事を見ると、「新生」の編集や対日対策の翻訳、及び対日世論のアナウンスとは、いずれも国民党の政策や政治方針を伝えることである。「留用」を通じて、堀田は、身分上から見ると、一転して国民党の対日政策の対外宣伝者となった。

堀田は宣伝部の対日委員会という組織の一員となり、国民党内部の事情を外側の人より一層詳しく知ることができた。紅野氏が『上海日記』の解題で指摘したように、「国民政府の日本人からの略奪と横流し、給与の遅配、疑心暗鬼と相互不信のなかで、堀田は中国への関心と嫌悪のアンビヴァレントな感情に揺れ動いている。その振幅のなかで堀田の中国への認識、国家や政治についての省察はより深められていったと言えるだろう。」[43]国民党内部の腐敗と混乱、民衆の苦痛を目にした堀田は、国民党の政府に失望し、中国の現状に絶望した。1946 年 7 月 14 日の日記において、彼は国家、政府などに対する失望と不信を記している。

> 今日民光から出る際に、ふと、「国家なんてものに如何なるものをも要求できない」といふことを考へた。これは中宣の無能さにつくづく呆れている今日この頃のことであるから、その辺から来たことだらうとは思ふが、矢張りこれは本当のことだ。もう僕は如何なる「公式機関」なるものをも信じまい。個人以外のものは信じまい。己れ一個の仕事を己一個がなしとげることのほかには、ほかに何かを強制し、何かを要求したりすることはしないことにしなければならぬ。[44]

「中宣の無能さにつくづく呆れて」、「国家なんてもの」に疑いを示している堀田は、さらに「公式機関」なるものを全て否定したと考えられる。この認識に至ったのは、無論、国民党宣伝部或いは国民党政府機関に失望したことが、一つの重要な理由であるが、理由はそれだけに限らないであろう。国際文化振興会に籍を置いていた時代に、文化役員の側に立った堀田自身、軍部への批判が甚だしかったということと結びつけて考えると、日本の軍部という統制機関に対する失望と、国民党政府に対する不信が重なったからこそ、彼は公式機関に不信を感じるようになり、個人の立場にたって生きようという覚悟が出来上がった

と結論づけることは可能である。この認識をもたらすものとしては二つの要因がある。一つは外在の原因として、日本側と中国側の文化機関での服務の体験が、国家、組織、個人を認識し直す、欠くことのできない重要な要素と考えられる。もう一つは内在の原因として、人間の不正に対する堀田の批判意識である。国際文化振興会時代にせよ、国民党政府時代にせよ、異なる状況に置かれても、堀田の不正に対する批判的な姿勢は不変である。このような外在の状況と内在の意識によって、堀田は国家、組織といった枠から抜き出て、一個の人間として物事を考えようという認識を形成した。これは彼が「留用」の後に獲得した新たな認識とも言えよう。

「留用」を通じて、堀田の「中国への認識、国家や政治についての省察はより深められていった」と前記の紅野氏は指摘しているが、認識を深くしていった理由についてまでは言及はしていない。以上の分析から、「留用」の経験によって、政治やイデオロギーから離脱した堀田の自己存在の位置が、彼が「国家や政治についての省察」を深めるために不可欠な条件であったと考えられる。この前提に基づいたからこそ、堀田は国家観念という枠組を取り除いて、個人という立場に立って戦争や日中交流を考えるようになった。

1946 年 6 月、中国の『改造日報』に掲載された堀田の「反省と希望」では、日中関係について次のように述べた。

> 外交官も軍人も、中日問題を己れ一個の人生運命の問題として厳粛に考へ詰めて苦しみ抜くこともなく、常に機械的な「解決」ばかりをはからうとしたのではなかったらうか。捉へ難きこの現世に於て、老子風に云へば所謂「解決」がもたらすものは常に決して解決ではなく、解決された諸問題よりもっと大きな未解決の問題が「解決」される毎にむしろ増えてゆくのである。中日両国の「心と心」の問題はここ何十年間一度も解決されなかったと極言することも許されるであらう。ましてや武力解決などは何物でもない。「国際問題の解決」と人性の問題は、林語堂氏も『啼笑皆非』に於て強調している如く、今世紀最大の問題であらう。[45]

日中問題を「人生運命」の問題として扱わず、ただ「機械的な解決」をした従来の日中交渉を、彼は厳しく批判し、「心と心」の問題こそが日中関係の問題と提示している。すなわち、「武力解決」即ち戦争をも徹底的に否定して「国際問題の解決」と「人性の問題」に関心を持つことになったのである。この「心の問題」と、帝国の「上海にいる」「文学に携わるもの」として語った「人の心の内面の問題」とは、両方とも「内面の問題」を重視する面が似ているが、この言葉を語った堀田の立場が根本的に異なることは注目に値する。「敗戦」の時点で、「中国人のうつりかわり」を内心の問題として「内地」に知らせるといった言説は、主に軍部の政策では民心を把握できないという意識から発せられたからである。しかし、ここでの「己れ一個の個人運命」や「中日両国の「心と心」」などは、明らかに国家や組織より、個々の人間の運命や心を重要視して語っている。「留用」を通じて、日本と中国両側の「機械」的外交を洞察したからこそ、中国だけではなく日本をも再認識することができ、「中日両国」の「心と心」の問題まで視野を広めてきた。この広い視野を形成した最も重要な要素とは、言うまでもなく前述した中国と日本の間の組織の壁を取り除いた、個人に立って日中関係を考える「国際感覚」である。

「留用」は堀田が中国を再認識する過程とも言える。国民党宣伝部に就職することで、彼は国民党に教育される人間でありながら、「民主主義」を宣伝する人間ともなった。いわば、「民主主義」の宣伝する者と宣伝される者という立場に立つことになった。このような特殊な状況に置かれることによって、彼は批判的に国民党政府を見つめることができ、国家、組織、個人の関係について考え直すことができた。国家

など公的な束縛から抜け出したからこそ、堀田は日中関係に対して、もはや政治やイデオロギーの立場からではなく、個人の立場から、各国民の運命に着目して、「心と心」の触れ合いが最も大切な問題だと唱えたのである。

おわりに

堀田は、日記の中に、「人生は事件がなければいけないのだ。仕事や事件がありさへすれば、人生は何でもないものなのだ」[46]と書き残した。もし人生が「仕事」と「事件」の組み合わせであるなら、彼の一年九ヶ月の「上海体験」は多くの「仕事」と「事件」があって、多彩で充実した「人生」であったと言えるだろう。

堀田は国際文化振興会の文化役員として、上海に派遣されることで上海の統治者の一人となったが、日本の「敗戦」で、一転して中国人に統治される「敗戦国民」とならざるを得なかった。その後、精神の虚無と生活難の中に国民党の思想教育を受け、日中交流に関わる情熱が湧いた彼は、自ら国民党宣伝部への「留用」を求め、「民主主義」を宣伝する者、宣伝される者となった。このような転々とした身分の転換と、その身分転換と共に状況の変化に直面しなければならない堀田は、時に能動的で、時に受動的で、日中両国の中に自分の居場所を探していた。いわば堀田の「上海体験」は、一種の「身分転換」だけではなく、彼の生き方を選択する際に欠かすことのできない認識の形成過程であったとも言える。

上海に渡航した青年堀田は、日中の葛藤に対する認識が欠如していたため、上海における自分の立ち位置に対して、全く無自覚であった。が、「外地」の軍部の振る舞いを目撃して、彼はやがて日本の一見は雄大な「理想」に隠された事実を発見して、国家の膨張に加担した自分の位置を認識するに至った。殊に日本の「敗戦」は、民心を把握できない軍部の政治について彼に再考を促し、政治における「内心の問題」に注目させるようになった。この新たに獲得した認識、すなわち人間の内面から日中交流を考える認識は、「敗戦」後国民党側への「留用」を通じて中国を知ろうとする彼の大きな原動力でもあった。この原動力に促されて「留用」に対して積極的であった彼は、国民党政府内部の暗闇や中国への絶望の中、国家、組織、個人の関係について新たな認識を獲得した。すなわち、国家という抽象的な観念から抜け出して、個人として生きることである。イデオロギーや政治ではなく、一人の人間という立場の上での日中関係を考えた彼は、やはり政治における「内心の問題」に注目し、政治問題を両国における人間の「心」の問題として取り上げた。

日中関係を人間の「心」の問題として考える認識は、上海で体験した「事件」によって、変遷しながら辿ってきたものである。日本に引揚げた堀田は、この「事件」と、この「事件」に対する「内心の動き」を、作品の中に取りいれ、独自の堀田文学を形成した。埴谷雄高によれば、堀田は戦争や政治の頂点である敗戦と革命の渦動の姿を眺めることによって、戦争の本質を知り、政治の本質を考究せざるを得なかったという特殊性を持っている。[47]この指摘は的確だと思われる。堀田の小説は確かに「政治の本質を考究する」という側面を帯びている。このような側面を反映しているのが、彼の小説の主人公たちである。歴史の観察者として設定された主人公たちは、政治の本質を鋭く思弁する内心の動きが克明に描かれている。例えば、『祖国喪失』において「共犯者」を自覚して苦悩する知識人の杉、『広場の孤独』で「コミット」を断ち切るためにあらゆる組織に加入しない木垣、『歴史』で「革命」活動を受動的に参加する虚無な「非革命者」の竜田など。この人物像の系譜は、上海の「敗戦生活」を体験した堀田の分身だというのが現在の定説となっている。この人物像を通じて、作家は国際政治或いは戦争の中に、国家や政党などの

メカニズムに軋轢される人間を表現し、上海で獲得した国家、組織、個人の関係についての認識を投影している。だからこそ、堀田にとっては、「上海体験」が人生の転換点であり、文学の転換点であったのである。

---

[1] 堀田善衛「上海にて」『堀田善衛全集 12』、筑摩書房、1974 年、3 頁

[2] 本多秋五「国際関係に眼を開く堀田善衛」『本多秋五全集』第 7 巻、菁柿堂、1995 年 8 月、526 頁

[3]『上海日記』の解題で、紅野謙介は次のように書いている。「上海行きはヨーロッパに行くためのステップだったと堀田はのちに記している。もはや敗戦は明かであり、日記にもあるように「上海客死」を覚悟で日本を飛び出したのであろう。ヨーロッパへ直行するコースは存在せず、上海を経由して何らかの機会を待とうとしたのだが、同時に中国をひと目だけでも見ようという強い意志があったと考えられる。（堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、342 頁）

[4] 武田泰淳、堀田善衛『対話　私はもう中国を語らない』、朝日新聞社、1973 年 3 月、46 頁

[5] 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流　国際文化振興会の創設と展開』、有信堂高文社、1999 年 8 月 5 日、17 頁

[6] 大岡玲『文芸誌「海」精選対談集』、中央公論新社、2006 年、206 頁

[7] 大岡玲『文芸誌「海」精選対談集』、中央公論新社、2006 年、211 頁

[8] 中国の詩人（1913～）。日本に留学し、堀口大学らの影響を受ける。当時上海の親日メディアである『中華日報』に勤めていた。（紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、17 頁を参照）

[9] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、18 頁

[10] 同上

[11] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、20 頁

[12] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、21 頁

[13] 堀田善衛「反省と希望」、『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、352 頁

[14] 同上、353 頁

[15] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、23－24 頁

[16] 同上、354 頁

[17] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、344 頁

[18] 中国では、日本軍と区別するため、一般の日本国民を「日僑」と呼ぶ。

[19] この統計データは日僑管理拠が保存していた資料によるものである。当時中国に残った日本人の人数統計に関しては、いくつかのデータがある。①陈祖恩《上海日侨社会生活史》によると、1945 年 8 月 10 日，上海の日僑は 64504 まで減少する。日本投降後、命令により蘇州、杭州から集まってきた日僑は 29957 名で、10 月 8 日までに上海に住んでいた日僑は 94461 人に昇るはずであるという。②日僑管理拠が発行した機関誌『導報』では、上海のみで、八月十日以前に日本軍以外の日僑数は 64504 人。日本が降伏後、命令により上海に集中した者 30335 人、10 月中に集中を完了した者 23581 名だと記載している。

[20] 日本語で言うところの「強制収容所」のことである。

[21] 第一区：東－斐倫路河濱、西—北四川路、南—百老滙路、北—斐西路と北四川路河濱；第二区：東—楊樹浦、西—斐倫路、南—楊樹浦・百老滙、北—旧公共租界線；第三区：東－黎平路、西—楊樹浦河濱、南—楊樹浦路、北—旧公共租界線；第四区：東—加納路、西—斉家宅劉家宅曹家宅、南—高家宅陳巷蔡家宅、北—旭街（上海日侨管理処宣传科《导报》第一期，改造日报社，1945 年 12 月，22 页）

[22] 戸→甲→保→区→日本自治会（会長、副会長、書託長、秘書室、組訓組、宣導組、文書組、総務組、帰国処理部）→日僑管理処（処長、副処長、秘書室、組訓科、宣導科、総務科、指導員）（上海日侨管理処宣传科《导报》第二期，改造日报社，1945 年 12 月，22 页）

[23] 王光漢氏は主に「集中区」と「保甲制度」をめぐって発言する。「見識のない人は「集中区」というこの名称を、ナチスの「集中営」と誤解し、厳しい制限を受けると想像するかもしれないが、それは日僑が集中的に住むことによって、雑居の不便を免れることを理解できないからです。集中的に住むからこそ、予定した保甲制度を実施できます。保甲制度は良い制度で、その細則に従えば、この組織的な生活から日僑も様々な便利と保障を獲得できるのです。」（上海日侨管理処宣传科《导报》第一期，改造日报社，1945 年 11 月，24 頁）

[24] 午後 8 時以降から翌朝午前 6 時まで、出入りが制限される。

[25] 『導報』第二期、1945 年 12 月、26 頁

[26] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、68 頁

[27] 住民の人数は 29663 人で、保数は 41、甲数は 372、戸数は 3511 である。

[28] 上海日侨管理処保存用書類に拠るものである。

[29] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、32 頁

[30] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、38 頁

[31] この座談会に参加したことを、彼は 11 月 12 日の日記に記した。（紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、82 頁）

[32] 日僑学校教育：小学校 132 ヶ所、中学校 1 ヶ所を設置する。そのほか、同文書院や厚生医専、基督教青年会などを復活させる。日僑社会教育：「導報」と「新生少年」の日本語版と中国語版を創刊する。日僑図書館を 96 ヶ所と博物館を 81 ヶ所設置する。ただし、博物館の陳列物は以前からあるものと日僑から寄贈するものである。日僑精神教育：日僑文化座談会を週に一、二回開き、社会名流や専門家を迎え市民講座を作るなど。日僑補助教育：脚本を創作して劇団によって各区で上演する。また、ラジオや映画館などを通じて、民主主義の思想を普及する。（日僑管理処保管用資料による）

[33] 『導報』第二期、1945 年 12 月、8 頁

[34] 三民主義とは、孫文が 1906 年に発表して、後に中国国民党の基本綱領として採用された革命理論である。民族主義、民権主義、民生主義から成り立っている。

[35] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、82－83 頁

[36] 川喜多長政（1903－1981）映画事業家。映画は国際相互理解に役立つとの信念で 1928 年に東和商事（東宝東和の前身）を設立。ヨーロッパの名作を多数輸入した。

[37] 同上、84－85 頁

[38] 参照　紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、103－110 頁

[39] 堀田善衛『めぐりあいし人々』、集英社、1993 年、43－44 頁

[40] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、170 頁

[41] 上海档案館資料 Q49－3－3 による

[42] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、177 頁

[43] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』解題、集英社、2008 年、346 頁

[44] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、202 頁

[45] 初出は『改造評論』創刊号、上海改造日報館、1946 年 6 月であるが、引用は紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、359 頁

[46] 紅野謙介編 堀田善衛『上海日記　滬上天下一九四五』、集英社、2008 年、136 頁

[47] 埴谷雄高『現代日本文学　27』、筑摩書房、1975 年、419 頁